2023 年 5 月 25 日　発行　　No.39

NEWS

Японо-Российское Общество Музыкантов

ЯРОМ

日本・ロシア音楽家協会（ヤロム）会報

Japan-Russia Society for Musicians

CONTENTS

1．ウクライナ侵攻から 1 年が経過して（金山茂人）…… 2

2．あっという間に 12 年が流れ（遠藤雅夫）…… 2

3．遠藤雅夫さんから引き継いで（志村　泉）…… 3

4．2022 年 9 月 30 日　器楽部会コンサート　祈り…～時代と文化の豊穣なる混交～

・戦争終結へ祈りを込めて（矢澤一彦）…… 3

・日本ロシア音楽家協会 9.30 公演を終えて（上野優子）…… 4

・シュニトケの音楽とバロック音楽の縁を感じ（安田謙一郎）…… 4

5．2023 年 3 月 22 日　作曲部会コンサート　～新たな光～ ソ連時代の知られざる傑作ソナタと共に～

・作曲部会コンサート「新たな光～ソ連時代の知られざる傑作ソナタと共に」の顛末記（福田　陽）…… 5

・近況と私感 －公演参加の先後から－（二宮　毅）…… 5

6．愛知ロシア音楽研究会第 13 回演奏会　開催報告とその後（筧　聰子）…… 6

7．ロシア音楽との出会い・SP レコードとの思い出（久行敏彦）…… 7

8．インタビュー　ロシア歌曲との 50 年（岸本　力）…… 8

9．新入会員挨拶（島田　萌）…… 11

10．懇親会風景 …… 11

11．追悼

・内田豊さんを偲んで（深町健男）…… 12

・入野禮子先生のこと（太田由美子）…… 12

1. ウクライナ侵攻から１年が経過して

会長　金山茂人

日本・ロシア音楽家協会の皆様、その後ご活躍のことと存じます。

私が入会いたしましたのは、当時の会長で作曲家の芥川也寸志さんに誘われたのがきっかけでした。この頃は、音楽を通じて日本とソ連の交流が盛んでした。何しろ日本人にとってロシアのメロディーは心を揺さ振られるものであり、私は特に、チャイコフスキーのピアノ協奏曲第１番、ヴァイオリン協奏曲、白鳥の湖などを耳にすると堪らなくなります。

無論プロコフィエフ、ショスタコーヴィチ等々、そしてその他素晴らしい演奏家が数多く居り、親しく感じております。

以来、つい最近まではロシアとの交流が盛んで、毎年のように互いに行き来し、私も2019年５月にウラジオストクに行き、大歓迎を受け音楽学校や名所、旧跡を案内していただきました。

ロシアがウクライナと戦争を始めた昨年、某テレビ局からインタビューの申し入れが、私たちの会のコンサート会場でありました。私は「戦争は許されることではないが、いずれの国であろうと音楽には責任がないのではないか」と返答しました。

今や、どうかロシアがこの戦争に終止符を打って平和を取り戻して欲しいと心から願って居ります。

終りに、この会のますますの充実を期待し、私の挨拶とさせていただきます。

2. あっという間に12年が流れ

前運営委員長・作曲　遠藤雅夫（休会中）

2022年５月中旬、僕は志村泉さんと新宿の喫茶店で向かい合っていた。電話で詳細はお伝えしていなかったが、次期運営委員長をお引き受けいただけないかと、まるで恋の告白を秘めているかのような緊張感の中にいた。

2010年２月、前運営委員長の辞任を受けて、重たい仕事が回ってきた。それから12年近く慣れないことの連続だった。経験不足なんだね。一人震えていても仕方なく、経験豊富な方々にお知恵拝借電話をかけまくった。その電話だって、もともとかけるの得意じゃない。昔ある先輩の女性から「あんたの声は暗く、電話かけにくいんだよ」と苦言を呈されたことを思い出し、ますます怖くなった。顔を上げると喉が開いて、明るい声になることに気づいた。

2011年の東日本大震災の年は何していたのだろう。この３月、定年はるか手前で勤務先大学を辞し、何人かでの打ち上げに向かう途中だった。新宿から目白まで明治通りを１時間歩いた。かなり前に逆コースを試し歩きした体験がもの言った。日・ロ総会資料からは震災の影響は読み取れない。

この12年間、会長は森田さんから金山さんに代わり、小野光子さんと金山さんの二人体制だった副会長は岸本さん一人となり、昨年からは村上弦一郎さんが加わった。事務局長は中島さん、深町さん、小松さん、そして現在の平井さんへと異動した。余剰金は2010年決算に比べ2022年度予算案では160万円増えているが、このことが良いのか、活動が停滞した結果なのかよくはわからない。ロシア公演を、とウラジオストクに行ったのは2019年だったが、残虐なロシアに変貌した現在、もうしばらくは無理だろう。なおこの公演での当協会からの支援は、現地での通訳・アテンド経費20万円のみで参加者は自費だった。誤解している会員もいるようなのでここに改めて記す。

当協会も含めてどの音楽団体も高齢化が進み、理事・運営委員の若い世代への移管が思うように進まない。デキる若手は収入につながらない作業を抱え込み、多忙を極める。新人の加入は思わしくない。少子化の影響だ。2021年10月現在の人口ピラミッドによると、65歳から74歳までの1740万人に対し、30代は1400万人、２割は減少している。20代に至っては1250万人、約３割減だ。音楽家を目指す人口はもっと減っているだろう。昨今の音楽大学の志願状況を見ればよくわかる。これから先、人口は増えない。当協会も含めて会員数は、なだらかに維持出来れば合格だと思う。

・・「今すぐご返事頂くのは無理だと思うので、数日後にご連絡します」。当初怖気づいておられたけど、何と有能な志村運営委員長だろうか。長年のご活動のキャリアが言葉の端々から生き生きと反映されている。素晴らしい方に代わっていただいた。僕の目に狂いはなかった。ありがとう。

3. 遠藤雅夫さんから引き継いで

新運営委員長・ピアノ　志村　泉

12年間務められた遠藤雅夫さんから引き継ぎ、突然運営委員長となって9カ月。このお役を何とか務めなければとかなり緊張しています。10年前に運営委員となり初めて運営委員会というものに出席した時には、“世の中ではこうやって物事が決まっていくのか！”とびっくりしたぐらい、「組織」というものには縁のない生活をしてきた私です。

そして突然のロシアによるウクライナ侵攻。ロシアの音楽までも偏見を持たれるようなことは、絶対にあってはならないという気持ちは強いです。

私自身は“ロシア物を得意とするピアニスト”などでは全くありません。ただペレストロイカ真最中に、「ソビエト国際音楽祭」という大規模な音楽祭で、間宮芳生さんのピアノソナタを演奏させていただき、その時の一行が間宮ご夫妻、松村禎三さんご夫妻、寺原伸夫さんご夫妻と野島稔さんと私でしたから、当時の日ロの重鎮の方々とご一緒させていただいていたことになります。私にとっては初めての外国で強烈な思い出なのですが、この時にこの協会とのご縁もついたのかもしれません。

ロシア関係のお仕事では、西武美術館でのロシア・アバンギャルドのオペラ(？)「太陽の征服」の上演に、また草月ホールでの映画「戦艦ポチョムキン」の、ショスタコーヴィチではなくマイゼルの音楽の生演奏による上演に参加するなど、ピアノ曲や室内楽の演奏とはまた違う、面白い体験もさせていただきました。

この10年ほど日ロのコンサートでいろいろな作品を演奏させていただき、最近ではウクライナの作曲家シルヴェストロフの作品との出会いが印象深いです。

作曲部会、声楽部会、器楽部会がそれぞれ活動しながら、ゆるくつながっている今の状態を、私はこの協会の面白いところだと思いますし、将来学術部会が発信するものがあってもよいのではとも思います。また部会を越えて一つのものを作る機会も生まれるかもしれません。そして今まで活動に参加する機会がなかった方々に、どのように参加していただけるかも考えていきたいです。

いずれにしても会員の方々に、「この協会に入っていてよかった」と思っていただけるように、微力ながら務めていきたいと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

4. 2022年9月30日　器楽部会コンサート 祈り…～時代と文化の豊穣なる混交～ 報告

戦争終結に祈りを込めて

器楽部会長・ピアノ　矢澤一彦

この演奏会は、6年前に催された、ロシア革命から第2次大戦までに書かれた作品による演奏会の続編です。大戦後に書かれた後期ソ連時代を中心とした“現代の”音楽ですが、西側とは違った独自の発展を遂げた、その音楽の多様性や魅力を紹介すべく、企画されました。お客様には馴染みの薄い音楽だったかもしれませんが、結果として非常に好評でして、「2時間半があっという間だった」「とても楽しめた」等の有難いお声を多く頂きました。これもひとえに出演者の素晴らしい演奏のお陰で、その迫真の演奏によって、作品独自の精神世界が、深く聴き手の心に刻まれました。そして、千葉潤氏の素晴らしい解説文とプレトークが、演奏会への理解を一層深めてくれました。

以下当日のプログラムです。

- プレトーク　［解説：千葉　潤］
- シルヴェストロフ／《使者》　［ピアノ：志村　泉］
- アニシモフ／《詩曲》　［ホルン：今瀬康夫　ピアノ：櫻井万記子］
- カプースチン／《8つの演奏会用練習曲》より第3番、第6番　［ピアノ：上野優子］
- グバイドゥーリナ／《シャコンヌ》　［ピアノ：志村　泉］
- ショスタコーヴィチ／《24の前奏曲とフーガ》より第24番　［ピアノ：武内俊之］
- デニソフ／《反映（ルフレ）》　［ピアノ：田中正也］
- アルヴォ・ペルト／《フラトレス》　［ヴァイオリン：高橋和歌　ピアノ：上野優子］
- シチェドリン／《2つのポリフォニックな小品》　［ピアノ：村上弦一郎］
- シュニトケ／チェロソナタ第1番　［チェロ：安田謙一郎　ピアノ：松山　元］

御出演の皆様、準備や当日の会場で演奏会を支えて下さいました皆様に、心より御礼申し上げます。

ロシアのウクライナ侵攻が始まって１年が経ち、未だに悲惨な状況が続いています。戦争の一刻も早い終結を願い、この演奏会を「祈り」と題しました。また、特にこの戦争初期には、ロシア音楽への風当たりも強いものがありました。しかし、この戦争の責任はロシアの当事者が負うべきですが、ロシア音楽とこの戦争は何の関係もありません。普遍的な美しさを持つロシア音楽を、他の素晴らしい音楽と分け隔てなく演奏する、という事を出演者で確認し合った上で、この演奏会に臨みました。また、文化という、何かを生み出す行為は、最も人間的な喜びであって、殺戮と破壊でしかない戦争の対極にあります。生み出す喜びを皆で共有するのは、とても大切な事のように感じられます。器楽部会はこれからも積極的に演奏会を催し、他部会とも手を携えて日ロを盛り上げて参る所存ですので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

日本ロシア音楽家協会 9.30 公演を終えて

ピアノ　**上野優子**

2020年からコロナ禍により演奏活動が困難となり、収束時期を待っていたさなかの 2022 年２月末に始まったロシアのウクライナ侵攻は、かつて過去の歴史として学んだ事柄が、残念なことに身近に感じられることとなり、私たちの意識を大きく変えました。

留学先でウクライナ人とロシア人の先生に師事していた私にとりましても、複雑な感情を持つこととなりました。一時期はロシア音楽の演奏を自重する動きもあり、公演の主催者や後援団体からの要望で、私自身もラフマニノフやプロコフィエフの作品を演奏出来ないことがありました。

そんな中でしたが、金山会長をはじめ会員の皆様の「芸術は平和のためにある」との言葉に勇気づけられ、昨年９月30日に行われた器楽部会コンサート『祈り…時代と文化の豊穣なる混交　エストニア～ロシア～ウクライナの現代音楽』に出演させていただきました。

自宅でもどんな場所からでも、好きな時間にインターネットでデジタル回線を通した音を楽しむスタイルに変化しつつある時代となりましたが、やはり「生の音」を体全体で感じて、お客様のダイレクトな反応を感じることのできるライヴの素晴らしさを、演奏者としても、そして聴衆としても改めて実感した一夜でした。また、千葉潤氏のプレトークが素晴らしく、演奏された作品にさらに魅力を感じた、とのお客様の声を多数いただきました。

当日、スタッフとして運営に携わってくださいました会員の皆様に深く感謝申し上げます。また、終演後に打ち上げに参加させていただき、会員の皆様とお話出来たことが大変嬉しかったです。

ロシアによるウクライナ侵攻はいまだ続いており、心を痛めております。ですが、このような時代だからこそ、音楽を通して平和への祈りの気持ちをこめながら演奏することを意義深く感じております。ピアニストは基本的に一人で活動することが多いのですが、会員の皆様と一つの舞台を創造していくことの大切さを学びました。これを糧に、さらに精進してまいります。

シュニトケの音楽とバロック音楽の縁を感じ

チェロ　**安田謙一郎**

だいぶ前になりますがスイス留学中に、偶然ラジオからシュニトケのピアノ曲が流れてきました。土産物の模造品のカウベルを内部にぶら下げて演奏する曲で、もしかすると初演の録音かもしれません。

ちょうど車でスイスの国境の辺りを山越えしている最中で、深い霧に包まれてスピードを減速したその瞬間でした。実際に牛の群れに囲まれたようでした。

私は自分では車の運転ができないので、友人が便乗させてくれなかったら、その放送も聞き逃していたかもしれません。日頃ラジオ放送をチェックしている程の音楽マニアでもありませんし、チェロソナタと因縁があるかどうかも定かではありません。

チェロソナタには内部奏法はありませんが、演奏会当日、舞台で思いついて、バロック弓を使用することに決めました。シュニトケの音楽とバロック音楽が結びついた気がしたのです。コンサートでは、共演の松山元さんのピアノには確信が漲って、素晴らしい体験をさせて頂きました。

2023年3月22日　作曲部会コンサート

5. ～新たな光～ ソ連時代の知られざる傑作ソナタと共に～ 報告

作曲部会コンサート「新たな光～ソ連時代の知られざる傑作ソナタと共に」の顛末記

作曲部会長　福田　陽

2023年3月22日（水）、表記のコンサートを開催いたしました。プログラムは次の通りでした。

1. 二宮 毅／上昇気流
2. 福田 陽／ピアノのための「1楽章ソナタ」第1番、第2番
3. 久行敏彦／「祈り」～フルートのための～
4. アリ＝ザデー／ピアノソナタ第1番
5. 平井正志／陽光の足跡
6. 島田 萌／温室
7. 金田潮兒／ Bleu forcé・Ⅱ pour Alto seul
8. リャトシンスキー／「ソナターバラード」第2番 作品18

会場は文京シビックホール小ホールで、日ロのコンサートとしては初めての会場と思います。この会場は改装工事のため長期間休止していて、昨年の11月から再開されたのですが、その情報を知ってまずは使ってみようと考えました。地下鉄後楽園駅・春日駅のほとんど目の前という地の利もあり、かなり使いやすいホールとの印象を持ちました。

ロシア作品の2曲は基本的には曲調を考慮して選びましたが、今回は生粋のロシア人作曲家は避けるようにいたしました。アリ＝ザデーはアゼルバイジャンの出身で、現在はドイツで活動しています。リャトシンスキーはウクライナの出身ですが、年代的にはソ連時代つまりロシアとウクライナが連邦国家として並立していた時期に活躍した作曲家です。一方、日本側の会員の作品については、従来通りアンデパンダン方式で募集して決定いたしました。

今回は、チケットの一般向け販売を、「チケットぴあ」に委託しました。チケットの売り上げにはそれほどの効果は無いと思いましたが、ホール入口の近くにあるチケットセンターでチケットを販売するためには、「チケットぴあ」に登録する必要があるという規定があり、これも1つの機会と捉えて登録する事にいたしました。

もう1つ初の試みとして、冊子「ぶらあぼ」の読者招待に登録いたしました。こちらはかなりの反応があり、応募者は50件74人で実際に来場した人数は50名でした。一方「チケットぴあ」経由の入場者は1名でしたが、どちらも今後前向きに考えて良いと思いました。

新型コロナ感染症対策が3月中旬より規制緩和されましたが、ホール側、運営委員側とも従来通りの対策を施すべきという方針で一致しましたので、手指消毒液、検温器等も用意いたしました。入場者の総数は113名でしたが、定員が299名ですので、関係者も含めれば半数近くの人が入場した計算になります。演奏も熱演続きで充実したコンサートとなりました。ご協力いただいた皆様には深く感謝いたします。

近況と私感 －公演参加の先後から－

作曲　二宮　毅

時間も時代も逆巻くことは無く、コロナ禍以前の環境が戻ることは無い訳で、ただアフターコロナがあるのみ。もっともコロナ以前も諸手を挙げる喜ばしさではなかった訳で、ガソリンを始め燃料費高騰は天をも突く勢いであったし、個人的に関わり深い韓国はNO　JAPAN旋風吹き荒び民間交流すらストップ。突入したコロナ禍の見通しの立たぬ日々に慣れ切ってしまい、正直、コロナ以前の生活感を思い出せない。新たな時代の局面をただ受け入れるしか無いものとようやく腹も括れた。「ペスト流行がルネッサンスをもたらした」説に懐疑していたが、今ならば未来から俯瞰する現代は確かに変革するものと納得する。マスク着用緩和もそれを購入すらしない暮らしには当面ならないだろうし、音楽業界の配信公演はより発展的に充実するのかもしれない。

昨春の会報ヤロムの拙稿を書き継げば上記で完となるところ、事態は最悪の混迷の只中。ウクライナ戦争に何一つ明るい見通しが立たない。戦闘の激化、死者数の累積、軍事兵器支援に伴う国家関係の複雑と展開予測の困難。コロナ禍の翻弄は防疫対策も自ら講じられたが、戦争ともなると何一つ手出し出来ぬままただ巻き込まれてゆく。ロシア人音楽家のポスト排斥や公演起用ボイコット、ロシア音楽の上演中止などの動向のその後は？そうした情報が届かないのは収束したから？よもやコロナ同様、あのまま局面を受け入れているなどと決して思いたくは無い。しかし1年を経てなお終戦しないこの状況から、開戦当初安易にも早期収束を思った私的な願いは無残に、長期化と悪化へ腹を括らなければならないのだろうか。

作曲部会・作品交流シリーズVol.4〈新たな光～ソ連時代の知られざる傑作ソナタと共に〉への参加は、初めて出品意欲の空回りに陥った。どんなコンセプトで出品したものかと。結局、時代は常に明るく拓かれてきた歴史を信じ、今を悲観し過ぎぬ心情を映したピアノ曲とした。矢澤一彦

さんの共感深き独奏には大いに救われた。個性的な作品の並ぶ公演プログラムは今回も健在で、それは現状への葛藤を乗り越えてきた各出品者の姿でもあり、協会名「日本・ロシア音楽家」の響きに一層の重たさを感じずにはいられない。時間も時代も逆行せぬ覚悟の上に、実状へ動揺すること無く活動への信念を貫くに尽きることを改めて痛感した。協会員諸氏には是非とも公演プログラムを一読して頂きたいとも思う。予想以上となった当日の来聴者数もまた強い励みとなった。

6. 愛知ロシア音楽研究会第13回演奏会　開催報告とその後

筧　聰子

「いま、お届けしたい音楽」愛知ロシア音楽研究会第13回演奏会は、ロシアによるウクライナ侵攻という思いもよらぬ事態の中、タイトルを当初の「私の好きなロシア音楽」から文頭のように変え、プロコフィエフ、スクリャービン、カプースチンなどウクライナの作曲家の作品も組み入れ、無事に終えることが出来ました。プログラム再編成をしながら、言いようのない憤りと悲しみを覚える毎日でした。「愛知ロシア音楽研究会」はロシア音楽の魅力を多くの方に知って欲しい、ロシア音楽の演奏者も増やしたいとの思いから15年前に会を立ち上げました。以来毎年5月にテーマを持っての定期公演を、冬にはロシア民謡を中心としたコンサートを、コロナ禍にあっても何とか継続してきました。

しかし、今回はこの時期の開催について考えざるを得ませんでした。国家と芸術、文化を分けて考えなければならない。どなたにも理解されていると思いつつ、今、ロシアの音楽を聞こうと思われるだろうか、大変悩み、会員全員が意見を出し合い、顧問の先生方からもお考えを頂戴しました。

「私たちは音楽家である。どこの国の音楽であれ、そこで生まれた作品に敬意を表し演奏してきたのだ。ひるまず演奏をし続けよう」これが顧問の方々も含め会員全員の意見でした。

また「音楽は人々を団結させる強力なツールだ」といった音楽家もいます。その言葉にも力を得て3時間にわたるコンサートを開催することが出来ました。

また、顧問であるロシア文学者・亀山郁夫先生の記事が日々新聞に大きく掲載され、当研究会についても少し触れてくださったこともあって、コンサート当日は予想を超えた多くの来場者でした。皆様が最後までじっくりとお聴きくださり、これまでに経験したことのない状況の中、熱い思いに満ちたコンサートとなりました。また、会場にはウクライナのハリコフから来日して間もない女性も来場されました。終演後「来て良かった！ハリコフのホールと響きがとても良く似ていて思い出した。ありがとう、ありがとう」と何度も涙ぐんで話され、エレベーターに乗って行かれたその姿は今も目に焼き付いています。その時、音楽は人と人とを繋ぐ最も大切なツールだと痛感しました。このコンサートをきっかけに会員同士の繋がりが、以前よりも親密になったように感じています。

しかしながら何の抵抗もなかった訳ではありません。ロシアの音楽が大好きだと言って毎回来てくださった方が「どうしてもロシアの音楽を聴く気持ちになれない、この事態の中、演奏することが理解出来ない！」と直接私に言ってきた人がいました。大のロシア音楽ファンだと思っていたのでショックでした。理解は出来るのですが…それ以来他のコンサートを誘っても未だ来ません、ロシアの歌を歌うのですよね…と言って。でも、諦めず気長に毎回誘ってはみようと思っています。

ここで、この3月24日に逝去されました藤井知昭先生について書かなければなりません。16年ほど前のことです。私に「東京でロシアの歌を歌っているのは知っているが、名古屋でもロシアの音楽を演奏する会などを作ったらどうか、愛知県芸にロシア音楽学の先生が赴任されたので紹介するから」と安原雅之先生を紹介いただきました。その後、5人の発起人が集まり、当研究会を発足させることが出来たのです。藤井先生は民族音楽学・小泉文夫先生の後を引き継がれた方で、国立民俗学博物館名誉教授など幅広くご活躍され、名古屋の文化向上には多大なる貢献をされました。

今年はラフマニノフの生誕150年・没後80年に当たり、当研究会もラフマニノフ作品のみのコンサートを企画しています。今から9年前「第5回演奏会 ラフマニノフ VS ラフマニノフ」のプログラムに、藤井先生自らが一言書きたいと、ラフマニノフの別邸を訪れた際の思い出を、その情景を彷彿とさせる素敵な文章で執筆してくださいました。今年5月のコンサートプログラムに再掲載させていただこうと考えております。

ここに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

さて、ロシアのウクライナ侵攻は全く先が見えません。心は痛み、気持ちは萎えますが、今年も5月26日に「第14回愛知ロシア音楽研究会演奏会・ラフマニノフ生誕150年記念」を開催致します。ラフマニノフはロシア革命の際、アメリカに渡り作曲家というよりピアニストとしての活躍が多く、ビヴァリーヒルズにて没しましたが、今、生きていたらどのように考え、どのように振る舞うのだろう、聞いてみたい思いに駆られます。1日も早くウクライナに平和が戻ることを祈念して止みません。

7. ロシア音楽との出会い・SP レコードとの思い出

久行敏彦

わたくしが小学校に入学するまで、我が家のオーディオではSPレコードが現役であった。夕食後の団欒時、父がよくレコードをかけてくれた。わたくしのお気に入りは「アイーダ」の大行進曲。第2幕2場のラダメス率いるエジプト軍の凱旋、彼らをねぎらう女性たちのバレエ、エジプトに栄光あれ！の大合唱、という絢爛豪華な約25分の音楽が、ズタズタにカットされSP片面4分に収まっていて、しかも声楽は一切なし、オケだけ、というかなり怪しい代物だったが、幼稚園児にとっては立派すぎる音楽であった。

小学校入学と時をほぼ同じくして、洋間に最新のオーディオが鎮座し、それまでのレコードプレーヤーはわたくしのおもちゃとなり、SPレコードも好きに聴いていいよ、となった。父が在宅の時にしか聴けなかったレコードが自由にいじれるようになり、嬉々としてよく鳴らした（聴いた、ではない）のが、シャリアピンが歌う「蚤の歌」と「ヴォルガの舟歌」だった。「蚤の歌」でのシャリアピンの笑い声は自由奔放、アドリブだと長年思っていたのだが、後年楽譜に接する機会を得、楽譜にかなり忠実な演奏だったのだと知ってびっくりした。「ヴォルガ」はもっぱら「アイダダアイダ」という呪文のような歌詞を真似て、おどけ歌いながら4歳下の弟と二人でゲラゲラ笑うのがお決まりのパターンだったが、呪文ではなくて「ヨイコラショ」なのだと知ったのはずいぶん後のこと。どちらの歌もSPレコード特有の針音と共にわたくしの脳味噌にこびりついている。ロシア音楽との馴れ初めは、この愛すべき2曲。

そのうちに何枚組かのアルバムにも目が向くようになり、よくターンテーブルで廻っていたのがホロヴィッツの「展覧会の絵」。洋間のオーディオではラヴェル編曲オケ版がよく鳴っていたので曲は知っていたし、各曲のタイトルも全部覚えていた。もちろん小学生のこと、「ビドロ」は「び泥」、「カタコンブ」は「固昆布」、「ババ・ヤーガ」は「婆・ヤーガ」と覚えていたので何とも間抜けな話ではある。

最近になって森垣桂一さんから、このホロヴィッツの演奏は、ラヴェル編曲のオケ版を聴いたホロヴィッツがその素晴らしさに感激して、より華麗なアレンジを施したヴァージョンで演奏したものだということを教えていただいた。当時のわたくしは、武骨なピアノ曲を換骨奪胎し、泥臭さを一切洗い流し、上品なエスプリに富んだ音像に仕立て直した「ラヴェルの作品」と共に「本物ではない」ムソルグスキーを繰り返し聴いていたことになる。成人してから聴いた、日本人ピアニストが弾くオリジナルの版はとても地味に感じたが、これはラヴェルやホロヴィッツのせいだろう。

この頃、母はソ連大使館で日本語の講師をしていた。彼女が大学を卒業した頃、世界初の宇宙飛行士、ガガーリン氏が来日し、ロシア語を習うのがブーム、という時期があったらしい。日ソ学院に日参し、ロシア語の習得に励んだとのこと。「東京オリンピックの時にはわりと稼いだのよ」というのが彼女の自慢話のひとつだった。

そのソ連大使館のツテだと思うが、バラライカのコンサートに招待されたことがあった。バラライカだけのオーケストラ。当時、撥弦楽器といえば、玉川カルテットのギターや三味線、牧伸二が弾くウクレレくらいしか知らなかった小学生にとって、三角錐の共鳴箱を持つ不思議な形をした大小さまざまな楽器がズラーッと並んでいる図は、壮観を通り超え、奇観であった。その珍しさに圧倒されたからか、この日の演目はどうしても思い出せない。バラライカが数重挺結集するとこんな景色か、と視覚を大いに刺激されたことでお腹いっぱい、「こんな音像になるのだ」という耳からの感激を堪能する余裕はなかったのだと思う。惜しいことをした。不思議な記憶として、演奏中、一人二人と舞台袖に消えていき、最後は誰もいなくなってしまった、という場面があった。ハイドン「告別」のフィナーレをバラライカオケに編曲したものだったのだろうか。ソ連大使館だけに、今となっては確かめる術も無いのが残念だが、稀有な体験ができたことは貴重な財産である。

1970年代の終わり頃、ソ連がアフガニスタンに侵攻し、「もしかしたら通訳で行くことになるかも」と楽しみにしていたモスクワオリンピックへの日本不参加のニュースが届いた時に、母が見せた無念の表情が忘れられない。通訳ができるくらいのスキルを身につけながら、とうとうソ連に行く機会には恵まれず、ロシアになってからも訪露の機会に恵まれなかった母も2018年の夏に旅立ってしまった。その翌年に息子が作った曲がウラジオストクで演奏される機会に恵まれるとは思いもしなかったであろう。

ウラジオストクのそこかしこで耳にしたロシア語は皆目わからなかったが、一つだけ耳慣れたフレーズがあった。母がよくわたくしに向かって発していたカンパジートル“композитор”とは「作曲家」という意味か、と遅ればせながら理解したのであった。

40数年前のアフガン侵攻の時、日本は「反ソ」フラッグを掲げたが、その後の日ソ、日ロの文化交流は途絶えることはなかった。我々は再び訪れるであろう平和の日に向け、今できることをやるべし、それに尽きるのではないかと思う今日この頃である。

8. インタビュー　ロシア歌曲との50年

岸本　力（聞き手　久行敏彦）

久行（以下H）：本日は宜しくお願いいたします。

岸本（以下K）：こちらこそよろしくお願いします。

H：素敵なお召し物ですね。

K：今日撮影するということでしたので。一張羅です（笑）。

H：岸本さんは男性なのでお年をお伺いするのは失礼ではないと思うのですが、1947年生まれで間違いないですか？

K：はい。75歳です。自分でも信じられない。75歳なんて（笑）。

H：ある時から、声を出すことを優先するためにお酒をお止めになったとか・・・？

K：そう、あるコンサートでね、声があまり出なかったんですよ。前の晩ウオッカ飲んでたんですよ（笑）。調子悪いとちょっと飲んで、声が出て、ちょっと飲んで声が出て･･･。でもそれをやっていて声帯が焼けちゃって･･･。それで「酒をとるか、歌をとるか」となって（笑）。当然歌をとりますよ。7、8年くらい前に止めたら、どんどん声が戻ってきました。それ以降、乾杯だけはほんのちょっとやりますが、それ以外はまったく飲まなくなりました。もともと好きでしたからね、飲んでた頃は家じゅうの酒瓶を空に（笑）。

H：休肝日なんて言葉は岸本さんの辞書には無かった・・・。

K：もちろん、毎日飲んでました（笑）。家内に怒られて（笑）。

H：奥様との馴れ初めは・・・？

K：当時、藤原歌劇団で「ロミオとジュリエット」をやりまして、彼女はジュリエット役、私はお父さん役だったんですよ（笑）。それがいつの間にかお父さんでなく、恋人になっちゃって（笑）。一人息子がいるんですが、彼も声楽家で二期会の会員として活躍してます。家族3人とも声楽家です。

H：岸本さんの修行時代のお話を伺いたいのですが、藝大では当時ロシア語の履修者が少なかったとか・・・。

K：初級は5～6人いたのですが、中級になると僕一人になってしまったんですよ。ロシア語の先生が「お前がいなくなると授業が無くなっちゃう、頼むから来てくれ」とおっしゃって（笑）。もちろん、「喜んで行きます」となりました。一人で90分1年間、レッスンでやっている曲を持って行って、歌詞の訳をみっちり教えてくれるわけですよ。

H：みっちりですね

K：そう、みっちり1対1だから本当にラッキーでしたね。図書館に楽譜を借りに行くでしょ、リムスキーの楽譜なんか貸出記録が真っ白なんです、私が初めて借りる楽譜、結構ありましたよ。

H：未開拓地を耕すがごとく・・・。

K：藝大の中では全部初演！私の歌が全部初演なんです。ロシアの歌には心惹かれるものがあってね、ロシア民謡とか・・・、ダークダックスとか、ご存じない？

H：いえいえ、知ってますよ。

K：ボニージャックスとか。あの人たちの全盛時代が私の青春時代なんです。「ともしび」とか「すずらん」とか･･･。

H：「カリンカ」とか。

K：「カリンカ」！そういう歌を聴いて育ったものだから、それらの歌が持つ「哀愁」が自分の心にスッと入ってきて。で、藝大に入った時にはみんな、ドイツ音楽、イタリア音楽をやらないと声楽家になれないぞ、と言われてね。言葉の発音とか、細かく注意されて、重箱の隅をつつくようなレッスンで・・・。ゲーテ・インスティトゥートにも通いました。

H：ゲーテ・インスティトゥートに通われたのは面白いですね。日ソ学院には行かれなかったのですか？

K：行っていないんですよ（笑）。
私の父は大工さん、母が農業で全然音楽とは関係ない環境。で、両親の仕事を手伝うと、土臭いものがあるわけ。泥だらけで。それとロシア民謡がものすごく合致したんですよ。とても安らいだんです。自分はロシア音楽に安らぐ場所を見つけた！というところで誰もやっていない世界、それに没頭できたんです。

H：自分の感覚に合って、安らぎを見つけて、しかも誰もまだやっていない、やる気が出ないわけがないですね。

K：そうそう、しかもバスでしょ、テノールだったら違いましたけど。バスの主役はいっぱいあるんです、ロシア音楽に。土臭いロシアもの、バス、ということが重なったことはラッキー、ほんとにラッキーでした。

H：素敵な出会いでしたね。

K：私はね、実は音痴だったんです（笑）。でも音痴だったおかげで作曲家のメロディーについて発見があったんですよ。作曲家が半音を使うというのは何か考えがあるんですね。チャイコフスキーの非常にきれいなメロディー、mollを使っているんですね。何でだろう？“幸せだ幸せだ”と言っている旋律なのに、という具合に。音程と

れないと何度も何度も練習するでしょ？そのおかげで作曲家に近づくことができて。作曲者の意図に気づくと声も出てくるわけです。逆に作曲者の意図に出会わないと声も出てこない。

H：音程が易々ととれていたら、スーッと通り過ぎちゃって気が付かなかった・・・。

K：そうそう、欠点もプラスにできるんだなあ、音楽も捨てたものじゃないなあ、なんてね（笑）。
チャイコフスキーコンクールの時も、その前の日本のコンクールで１位をいただいた時も、これは私の人生の原点なんですけれども、「ボリスの死」を歌ったんですね。その「死にざま」をとても具体的に表現したんです。親父が死んだ姿を見ていたからですね。ボリスの死と一致したんです。素直に表現したんです。恥ずかしくても何でもいいから。のた打ち回ったんです。その時の毎コンの試験官が「初めてこんな歌手が出てきた、あんな具体的に表現するバス歌手、すごい人だ」ということで満場一致の一位ですよ。

H：すごいですね。

K：フルートの吉田雅夫先生がテレビで「すごい人が出てきた、既成概念を捨てた名演」と言ってくれました。楽譜に書いていないウオー、という叫びを入れたりしたんです。そのままの勢いでチャイコフスキーコンクールでも「こんなボリスを歌える人がいない、しかも日本人で」ということで最優秀歌唱賞を貰ったんです。

H：お父様が力を貸してくださったんですね。

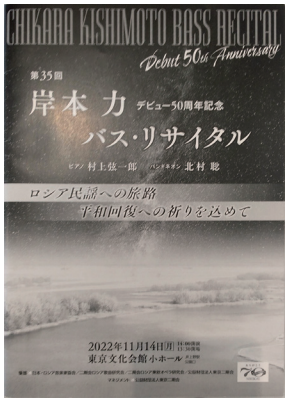
K：ほんとにそうです。親父が乗り移っていましたね。今でもそう思っています。親父の力が、声が良いというだけで歌を始めて音痴だった私をコンクール一位にしてくれて・・・。コンクール一位になったら「声楽家」と言われるじゃないですか、テレビなんかでは。すごかったですよ。雑誌に出たりね。でもね、世間はそんなに甘くないですよ。ボーンと落ち込むんです。

H：え、そうなんですか？

K：たまたまロシアものでは、死ぬ間際の歌を立派に歌うけど、じゃあドイツもの歌ってください、宗教曲歌ってください、て来るじゃないですか、仕事が。歌えないんですよ。そんな時にね「ああ、岸本、ダメだなあ」って言われましたね。良い噂はあまり広まらないけれど、悪い噂はパッと広まるんです。

H：それは嫉妬もあったんじゃないですか？

K：今考えるとね。でもその頃はそう考える余裕なんて・・・。落ち込んで、仕事も来なくなって・・・。
で、これをやりだしたんです（岸本力バスリサイタルのプログラムを広げる）。リサイタルをやりだしたんです。俺は死んでないよ、と自腹切ってリサイタルを。



最初はオリンピックの年に、という感じで４年に一回、そのうち２年に一回。声楽家はそのうち声が出なくなるじゃないですか、明日はもう出ないんじゃないか、という危機感はいつでもあるんです。で、ある時から毎年やろう、となって35回やったんです。

H：1994年からですね、毎年になったのは。

K：私がリサイタルをやる目的というのは、干されて、でも私は勉強して・・・。私は歌いますよ、ロシアものをこんなに歌いますよ、ということで僕の励みにしてきたわけですね。

H：（リサイタル記録を見て）見事にロシアものばかりですね。

K：はい、全部もう、初演でしたね。ショスタコービッチやった時に芸術祭賞貰ったもので・・・。余計にロシアものだけでやろうとしましたね。

H：集客のことを考えたら日本歌曲とか入れる人もいると思うんですけど、徹底していますね。

K：もうね、全部赤字でした（笑）。お客さんは半分も入らない。

H：そのようなことを気にしないで、ご自分がお考えになるプログラムをやり通した！

K：やってきたんです、35回。

H：このプログラムは「本物だけをやりたい」と考えて頑張っている人に対して、ものすごく励みになるものだと思います！！

K：これは私のポリシー、といいますか、ロシア音楽を広めようと、開拓されていない曲の本邦初演を全部やって、こんなにロシア音楽には良いものがあるよと、いうことを何としても僕がやらないと、誰もやらないから、という自負はありましたね。

H：わたくしは作曲が専門で、畑が違いますが、勇気をもらいますね、こういう活動をされている方がいるのは。

K：それはもう、ロシア音楽を何とか広めようという一念ですね、自分がこれに命を懸けてやっているという証しですね。こういうことをやっていると支持してくれる人が増えてくるんですね。そういう方々、どんどん高齢者になりますけどね、高齢の方を大事にしながらやってきました。リサイタルが私の音楽家としての生命線ですね。これやらなかったらただの・・・酒に酔ってね、歌ってないと思います・・・。歌が好きだし、自分がやらなきゃ誰がやる！といつも思うんですね。自分が・・・、今ウクライナ戦争で・・・、自分が歌わなかったら誰がやるんだ、いつもそう思います。だから敢えて・・・。今年もやります。敢えてぶつかっていく・・・、僕が先頭になっていこうと思ってね・・・。

H：この流れの中でオブラスツォワ先生とのご縁が・・・。

K：そうです。約15年武蔵野音大でお世話になりました。

H：先生に2009年、プーシキン賞に推薦していただいたんですね。推薦してもらってから３年後にプーシキン章受章・・・。

K：よくご存じですね（笑）。

H：ある程度予習してきましたから（笑）。

K：2009年のリサイタルでプーシキンを歌ったんです。その前にレッスンしていただいて。リサイタルの前に。「キシモト、なんでロシア音楽が好きなの？」と訊くんですよ、「いや、血が騒ぐんです」「珍しいなあ、世界にもなかなかいないわよ」という会話があって。その時のレッスンで、ええと誰だっけ、ラフマニノフと同世代の･･･。

H：メトネル？

K：そうそう、メトネルの歌曲を持っていったんです、2009年。「どこで探してきたの？私知らないわ」と言うんですよ。メトネルは当時のソ連では歌わせなかったんですよ。

H：どうしてですか？

K：メトネルはねえ、もともとドイツがルーツで。ラフマニノフが表舞台でメトネルは日陰の身。ドイツ系だったから批判されたのね。それでオブラスツォワ先生はあまりご存じなかったんです、メトネルを。それでね、「ここまでやるんだったらね、こんな人世界にいない、あなたを推薦するわ」って。もうそれから大変、今までのプログラム・・・、全部ロシア語に翻訳して出せ、と（笑）。もう大わらわで22回までのリサイタルのロシア語訳を・・・。「たしかに預かったわ、持っていくけどね、推薦はするけどね、絶対入らないわよ」と言われたんですけど（笑）、入ったんですよ。プーシキンメダル。

H：連絡貰って「モスクワに来てください」といわれてモスクワという名前の喫茶店だと思った・・・。

K：そうそう（大笑）、何で知ってるんですか！（笑）

H：予習してきましたから（笑）。

K：1月の大学試験期間中に電話があって、大使館から「2週間後にモスクワに来てください」「どこですか？喫茶店ですか？何しに？」「違います、あなたに賞が」という会話で。小澤征爾さんと僕だったんです。

H：同じ年だったんですね。

K：小澤征爾さんはその時体調悪かったから・・・ご辞退なさって･･･、私だけが。で、面白いですよ、パスポート持ってなかったんです。でもね、プーシキンメダルもらったからということで一日で作ってくれました（笑）。

H：パスポートもビザも。

K：午前中に行ったら、午後まで待っててくださいと、もうできあがりましたと、すぐもらいました、すごい待遇（笑）。

H：ははは！

K：さっきの、喫茶店だと思った話、大使館の人が賞のことを説明する前に「大統領があなたに直接表彰します」と言うので「何ですか、それ」と。心当たり無くて。3年経ってたから・・・。あ、そうか、オブラスツォワ先生が推薦すると言っていたメダルのことか、と（笑）。

H：表彰式ではメドヴェージェフ（当時の）大統領が日本語で・・・。

K：そうそう！日本語で「頑張ってください」と言われて。これねえ・・・、今こういう時代だからあんまり大きい声で言えないんだけど・・・親日家でいい方ですよ。

H：今日、ぜひお伺いしたいのは、これから、日ロ関係がどうなるかは未知数だと思うのですが、今まで積み上げてきたものは消えるわけないし・・・、どんなことをお考えでいらっしゃるのかを。

K：これからですか？

H：今、岸本さんのお立場で、モスクワに行く、なんてことは政治上できないのでしょうか？

K：歌いに来てくれ、という話はありましたけれど、モスクワで。やはり行けないし、体力的にももう無理かなあと。今、ロシアの歌を歌うということが非常にね、つらいですけど・・・、私が歌わなければ、誰も歌う人がいない。先頭になって、矢面に立とうと思っています、覚悟しています。去年、日経主催でリサイタルやったんです、その時、女の人が「お前ら、反乱分子か！」と叫んだんです。

H：それは・・・演奏中ですか？

K：いえ、コンサート始まる前に。女の人が騒いだんです、「反乱分子か！」と。日経新聞が大々的に取り上げてくださったんです。日経がプロデュースして頼まれたリサイタルで。

H：その時もオールロシアプログラムですか？

K：はい。6月でしたから、戦争真っ只中じゃないですか、途中でNHKが取材に来たのですが、いろいろあって、リサイタルのことはテレビに流れましたけれど・・・、6月に行われます、ということだで、詳しい日にちや、どこでやります、ということはカットしながら・・・。辛かったですね。11月のリサイタルの時も誰かが来て騒ぐんじゃないか、不安がありました、まあ無事に終わりましたけどね。今はどうであれ、ロシアの歌が好きだから・・・、いろいろ葛藤してきて・・・、どうしてもロシアの歌が好きなんです、音痴だと言われて50年やってきて、“ロシア音楽命”じゃないですか、悪く言われても音楽と政治は違うと言っても・・・。事実、今までずうーっと私のリサイタルに来てくださった人の中には、この戦争が始まって「すみません、もうチケット買いません」という人がいました。それも一人二人じゃないです。何人もいました。今まで私を応援してくれてた人たちが・・・。それはショックでしたね。でもね、自分の考えを述べてもしょうがないから・・・、「わかりました」と言って・・・。

H：私は、声楽家のお立場でしたら、迷うことなく演奏で主張をすればいいと思いますが・・・。別にラフマニノフやメトネルが悪いことしたわけではないし・・・。

K：でもね、ロシア語が・・・、ロシア語の歌というだけで、気に食わない人がいますね、単純に。それはもう、しょうがない。ロシア民謡には哀愁があって心を癒してくれる、音楽こそ平和につながる、言いました。プログラムにも書きました。で、やりましたよ、だけど、自分が平和回復への祈りを歌ったところで何にもならないんじゃないか、という虚しさが湧いてきて・・・。独りよがりだなあと思ってしまって。でも好きだから・・・、たとえ

赤字になっても、今年もやります、来年もやります。

H：我々日本人が外国の人から「お前たちは飛行機に乗って敵艦に突っ込む民族なんだろ？」て言われたら・・・、昔はそういうことがあったけれど、今は違うじゃないですか、同じように大多数のロシア国民は良い人で、平和を願い、でも一部の人だけでしょ、迷走しているのは。大多数のロシア国民は悪くない、と子供にもわかりやすくマスコミが報じないから。

K：・・・その通りです・・・。でもマスコミはそれを言わないから。でも我々は無力だから、「違いますよ！」と訴える勇気もないし・・・。確かにロシア（政府）は悪いですよ、でも音楽までもダメだというのは・・・。日ロ音楽家協会の中にも考え方・・・。日ロ協会の会員でいるからには・・・、今後どうなるか、というのは誰にもわかりませんけれども、日本・ロシア音楽家協会を支えてもらいたいと思います。

H：今お話しいただいたことは、これまで真摯にロシア音楽に取り組んでいらっしゃった方のものすごく重みのある発言として書かせていただきたいと思います。
今日は貴重なお話をたくさんいただきありがとうございました。

K：こちらこそありがとうございました。

9. 新入会員あいさつ

島田　萌

日頃は一般企業で働きながら創作活動をしています。「日曜作曲家」として、アレクサンドル・ボロディンには少なからず憧れと親近感を抱いています。

作曲の道を志した高校時代からの師である久行敏彦氏より、協会にお誘いいただき、2022年6月に正式に入会のお許しをいただきました。

今年3月には作曲部会の演奏会にも参加させていただきました。現在の時世において、大変意義深いコンサートであったと感じています。

今後、協会での活動を通して得られる経験はわたしの創作に多くの実りをもたらすでしょう。協会のますますのご発展に少しでも力を添えられるよう、より一層精進してまいります。

10. 懇親会の風景

新しい年を迎えた1月10日（火）、銀座「ロゴスキー」にて新年会が行われました。コロナで屋形船も新年会も暫く自粛が続いていましたが、久しぶりの明るいイヴェントで参加された10名のみなさんは和やかな時が流れるのをを堪能されていました。今年は屋形船が復活するとよいですね！

編集部

11. 追悼

内田豊さんを偲んで

深町建男

当協会監事の内田豊さんが、病気療養中のところ昨年４月（享年 84 歳）にお亡くなりになりました。

内田さんは、以前、（株）全音楽譜出版社に勤務していた時期に、日本・ロシア音楽家協会の事務局を担っておられました。その頃は、運営委員長は故寺西春雄さんで、小林久枝さんと中島克磨さんが協会会員として事務局を手伝っておりました。

その後、事情があって（株）河合楽器のカワイ音楽振興会に、寺西先生から河合楽器に事務局を担ってほしいとの依頼があり、その振興会に勤務していた深町が事務局を担当することになりました。

内田さんと直接お会いする機会を得たのは、会費の管理と協会のコンサートの費用管理などを担うことになった時のことです。内田さんには協会の監事として日・ロの総会の時期になると会計資料を内田さんのもとに持参し、監査の署名と押印をしていただくため、何度かお会いする機会を得たのがはじめです。当時は一般社団法人日本楽譜出版協会事務局長（現名誉顧問）で事務所が神田明神の近くにあり、時々お邪魔していました。

そんな折り、たまたま私が会社を退職することになり、日本楽譜出版協会の事務局を一緒に手伝ってくれないかとの打診があって、５年ほど一緒に仕事をしたことが懐かしく思い出されます。

月一回の運営委員会の会議は、当時、代々木にあった振興会の事務所の会議室を利用していましたが、事務所が品川方面に移転になり会議室も狭くなったため、内田さんの尽力もあって新宿区落合にある全音の会議室をお借りすることが出来ました。しかし、このところのコロナの影響もあり、現在はオンライン会議になっています。

日本・ロシア音楽家協会が今日あるのは、内田さんがその一端を担っていただいたことに間違いはありません。どうぞこれからも遠くから見守っていただきたいと思います。

入野禮子先生のこと

太田由美子

入野禮子先生が亡くなられた…2022 年の３月に玄関先で転ばれて大腿骨の骨折、入院手術・リハビリを経てそろそろ退院というときに院内で手を骨折、更なるリハビリを続け今度こそ退院という時に急な体調の悪化で再延期、それでも回復されていよいよ介護を受けながら自宅療養、と準備も整った矢先のご逝去でした。折からのコロナ禍でお見舞いも叶わず、あの活動的な禮子先生が外部からの刺激もないまま回復への気力も落ちてしまったのも理由の一つではないかと残念でなりません。訃報が届いた 10 月 29 日は丁度通奏低音で参加する演奏会本番の日、バッハのロ短調ミサを心ひそかに先生に捧げるつもりで演奏させていただきました。

ご葬儀には昔の桐朋学園の子供のための音楽教室での教え子達がたくさん集まり思い出を語り合いましたが、出てくる言葉が皆一様に「厳しかった！」「怖かったね」でした。私たちの学年は特待生のクラスが作られ禮子先生が担当だったのですが、その授業内容はいわゆる受験ソルフェージュの範疇を大きく超えてピアノアンサンブル、伴奏付けや即興演奏、楽曲分析や作曲、現代音楽の演奏法、更にはステージマナーなど多岐に渡りました。最初は皆出来ない、知らない…私たちの何光年も先を見ている禮子先生は歯がゆかったに違いありません。ぐずぐずしていると「できないの？！」「こんなことがわからない？」時には名指しで「○○さんが間違えました！」と。毎週の授業は緊張の連続でしたが、音教卒業時には音大生と変わらない総合的な音楽知識が身についていました。

その後も禮子先生とはいろいろな場面でご一緒しました。中でもご夫君の入野義朗先生の生誕の地であるロシア・ウラジオストクとの交流や、ご夫婦でご一緒に築いた JML 音楽研究所での活動では私も及ばずながら長期にわたってお手伝いさせていただきました。ある時期からは頼りにもされていたようで、その昔のご恩をほんの一部でもお返しできていたのか？と嬉しく思っています。勿論禮子先生と同じような活動は出来ませんが、これからも先生が築かれた数々の音楽活動の一部分でも継承していけたらと思っています。

思えば今の私の音楽活動には、音感や諸々の知識に基づいた分析力など禮子先生に教えていただいた事柄が大きく役に立っています。感謝しかありません。

入野禮子先生、ありがとうございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

日本・ロシア音楽家協会編集部　発行日 2023 年 5 月 25 日
発行人：金山茂人　編集者：久行敏彦、平井正志、大場晶子
〒 130-0021　墨田区緑 3-19-5 すみだチェリーホール方　　TEL.090-5992-7151　FAX.045-544-2390（平井）
E-mail : japanrussiasfm@gmail.com　　http://japan-russia-sfm.net/